

〈小塩〉の問狂言

三宅 晶子

禪竹作とされる〈小塩〉の本説は、『伊勢物語』七十六段「二条の後の、……氏神にまうで給ひけるに、近衛府にさぶらひける翁、……よみて奉りける。大原や小塩の山もけふこそは神世のことも思ひ出づらぬ」である。

この曲の特色に、本説紹介の占める割合が少ない点がある。3段「上ゲ哥」で、都の花盛りを賛嘆した後に本説の歌を引き、続く4段「問答」でワキからその歌の作者を聞かれて「この大原野の行幸に、在原の業平供奉し給ひし時、忝なくも後の御事を思ひ出でて、神代の事とは詠みしとなり。(五番綴松井本の本文使用)」と言及するに過ぎない。二条の後の名が、どこにも出てこないことは注目に値する。しかも天皇の行幸に供奉した時の歌とも取れ、後の事をどう思い出したのかもわからない曖昧な表現なのである。本説の物語を知らなければ、理解できないことである。それらの説明不足を補っているのが、問狂言である。問狂言の諸本では、能のなかでは触れられていない、藤原冬継が春日大社を小塩へ

勧請したという明神の縁起を語った後、七十六段が紹介される。さらに業平が小塩明神であることが付加されたものが多い。これら三つが揃って初めて〈小塩〉の本説世界は成り立つのであるが、問狂言以外のどこにもそれを明示したところがないのである。

さてここで想起されるのが、『芭蕉葉の夢』や、『雪の中の芭蕉』のことを、説明なしに使っているのが問題で、もしアイの説明を前提に書いたのならアイの発展史上の大きなポイントであるし、そうでないのなら、観客史上の問題として考えねばならない(岩波日本古典大系『謡曲集下』芭蕉解題)とされる〈芭蕉〉である。5段「ロンギ」の「道牙やかに照る月の、影はさながら庭の面の、雪のうちの芭蕉の、偽れる姿の」と、10段「クセ」の「よしや思へば定めなき、世は芭蕉葉の夢のうちに、男鹿の鳴く音は聞きながら」であるが、いづれもそれぞれの故事を媒介としてしか明確に理解できないよう作詞されている。それは〈小塩〉の本説紹介の部分と類

似した表現であるといえよう。作品理解に際してこの様な特定の知識を必要とする表現が、計画的になされたものか、単なる作者の癖か、判断の困難な所である。特に〈芭蕉〉は、禪竹の作詞上の特色として、背景に持っている世界がかなり特殊な歌語を単独で使用して、しかもその世界までも取り込んでいる場合が他にも見られるので(拙考「禪竹の歌語意識」『目白学園紀要』九一年三月予定)、問狂言の問題には直結しないかもしれない。

〈小塩〉の場合も、禪竹のそういった不親切で言葉足らずの傾向の現れではあるが、単に癖だけでは片付けられない、設定上の必然性も見られるのである。

この曲における業平は、小塩明神・歌舞の菩薩・陰陽の神といった当時の認識を背景に、神的存在として登場する。7段「オキゴト」に、「和光の影に業平の、花に映じて衆生済度の、姿現し給ふぞ」と明言されている。業平出現の意味は、神の奇瑞として位置づけられている訳だが、前後場を通じて脇能的処理はなされておらず、祝言性も祝福もまったくない。大原野の花見を背景に、在りし日の様々な恋を懐旧して業平の歌舞を見せる能である。むしろここで重要なのは、神的性格が出る理由にのみ使われている点である。地獄のイメージを投影させない手段として、そ

れを利用して考えると考えられるからである。世阿弥作の〈融・江口〉などにおいては、舞を舞わせる手段として後シテを神格化したために、亡霊である前シテ登場の意味と矛盾が生じている。又一方で〈須磨源氏〉は、光源氏を都率天に住む菩薩として扱い、衆生済度の為に出現させて脇能的に処理している。これに対して〈小塩〉は、亡霊即ち地獄からの脱出、神仏即ち衆生済度という、登場の意味の明確な区別を無視した自由な設定をして、花見と恋という最も華やかなものを二つ組み合わせて、作者の考える業平の人格を強調的に表現している曲なのである。

舞台を大原野としたのは、花見の景を導入するためであり、歌枕としての大原野は紀貫之の歌一首を使用するのみで、ほとんど活用されていない。有名な歌や歌語を多用して、都における一般的な花見の情景が描写される。『伊勢物語』七十六段は、大原野と業平を結ぶための材料である。後場で紹介される恋が二条の后とのものに限定されていないのも、特定の物語に拘泥せずに華やかな恋の思い出を印象づけたためであろう。世阿弥が名所の風情を重視し、それを背景に本説の物語を丁寧に紹介することを夢幻能の常套的作法としていたのとは、かなり違った手法の作品であると言えよう。物語紹介が目的でない夢

幻能の場合、観客に対する本説の確認をどうするか、能の中ではなるべく簡単にしておいて、間狂言を利用するのはうまい方法である。

間狂言は『習道書』に「信の能の道やりをなす事……、その理を弁じて、嚴重の道理を一座に云間かするを以て道とす。」とあるように、世阿弥時代から、能の中で語られる謂われや来歴を簡略に説明するものであった。本来後場のための着替えの時間稼ぎとして置かれたものであろうから、筋書き展開上重要な役割が担わされていた訳ではあるまい。それは世阿弥自筆本の〈江口・布留〉等からも推察される。信光時代以降の風流能になると、間狂言が重要且つ華やかな見せ場の一つとして設定されるようになるが、世阿弥から信光までの間のいつごろから、間狂言にそのような役割が担わされたかは、問題となるところである。寛正六年の演能記録を持つ〈小塩〉は、能の中で二条の後の名前さえ明らかにされていない。間狂言に本説紹介の役割を与えて計画的に作られた可能性が大きいのではないだろうか。となると〈芭蕉〉の場合もそうである可能性が出てくる。

(目白学園女子短期大学講師)